

竹沢泰子著

アメリカの人種主義——カテゴリー／アイデンティティの形成と転換

名古屋大学出版会、2023年、516頁、4,500円＋税

本書は、「人種」に関する理論研究においてアメリカなどをフィールドに文化人類学の見地から多数の論考を世に問うてきた筆者による、長年の研究の集大成と呼べる大著である。タイトルにもある通り、主にアメリカの人種主義をめぐる事象や史的展開が分析の組上に載せられているが、著者がこの分野をリードしてきた背景には、「欧米とその植民地にしか関心がない研究者たちに対し、東アジアも含めた人種差別の問題を…共時性のあるものとしてアピール」(420頁)しなければならないという使命感がある。人の移動に伴う社会やコミュニティ、アイデンティティの変容に関心の高い当学会の会員にとっては、この本で提示される概念や視角が有用であることは言を俟たない。なぜなら、「アメリカの」とは謳っていても、つまるところ「人種」のような人間集団の序列化を伴うカテゴライゼーションがもたらす暴力は普遍的なものであり、アメリカでの展開はあくまでもその一例にしか過ぎないからである。とは言え、資本主義、グローバル化、それらに伴う人・モノ・カネ・情報等の流出入によって社会の在り方が定められ、さらに世界の諸地域にも多大なる影響を及ぼしてきたアメリカという国であればこそ、人種や人種主義について考察する際のフィールドとしてふさわしいということもまた否めない。

本書は序章・5部10章・終章による全12章の構成になっており、広告やジョークにおける人種ステレオタイプを扱った第1部、アメリカ人類学と人種の間を論じた第2部、センサスや帰化法から人種のカテゴリー化を検証した第3部、日系アメリカ人の経験やアイデンティティの変容をたどった第4部、そしてアジア系やミックスレイスのアーティストに取材した第5部から成る。第1部から第3部までは社会において人種が定義されたり集団の境界線が設定されたりする過程を明らかにしている一方、第4部・第5部においてはより当事者の意識やエージェンシーに焦点が当てられている。

以下、より詳細に各部の内容を記述する。第1部において著者は、19世紀末から1960年代にかけての広告やジョークに含まれたシニフィアン(記号表現)を手がかりに、支配階級である白人が押しつける人種マイノリティに関する解釈を読み解くとともに、人種間の関係性や記号を構成する要素について質的・量的な分析を行っている。記号が持つコンnotation(共示)を明らかにするだけでなく、ステレオタイプがマイノリティに与える深刻な影響について警鐘を鳴らす。第2部では人種が生物学的実体ではなく社会的構築物であるという認識が共有されるようになるまで、啓蒙主義時代以来の欧米、特にアメリカの人類学者たちがどのように人種に関する「知」を築いてきたのかを詳述し、その功罪を明らかにしている。そのうち第4章においては生物進化論に対する人類学者の反応について考察が行われているが、進化論の人間への適用について人類学が十分に社会を教育しなかったため、人間は古代以来不変であるとする解釈や固定化された人種分類が広く支持されるに至ったと著者は見ている。第3部ではアメリカの諸制度によって人種の境界がどのように設定されてきたのかを検証するため、センサス(国勢調

査)の人種に関する項目の変遷を植民地時代から現代までたどるとともに、帰化法や非白人の帰化権をめぐる裁判記録を分析し、白人性が構築される過程を跡付けている。そして、これらの分析からセンサスと帰化法が相互補完的・同時代的に連続性を有していたことを明らかにしている。第4部は日本人／日系アメリカ人の経験やコミュニティ形成をテーマとし、移民排斥や第二次世界大戦時の強制立ち退き、1980年代の日米貿易摩擦といった人種化の契機に着目するとともに、時代とともに人種に基づくアイデンティティがどのように日系社会内において変化したのかを、19世紀後半から現代に至るまで詳細に分析している。なかでもサンフランシスコ日本町における日系組織の変遷を追った第8章は、著者の学部生時代の卒業論文調査が出発点となっており、アーカイブの閉鎖によって現在では閲覧不可になってしまった史料も使用されているため、特に重要な研究史上の貢献であると言える。そして、複数のアーティストやキュレーターへの聞き取りを基に組み立てられた第5部および終章は、最も著者の独創性が発揮されたパートである。1990年代以降のアジア系アメリカ人アーティストによる作品の展示をめぐる動向や、創作の原動力と人種的体験の関係性が、個人の興味深い語りとともに明らかにされる。要点は次のようになろう。21世紀に活躍する若手のアーティストはアイデンティティ・アートを乗り越えているように見えるが、一方でアジア系というアイデンティティが創作の重要な動機となっていることもまた事実である。しかし、人種は必ずしも分断だけをもたらすものではない。現代のトランスナショナルなアーティストたちは、「ほどく」「つなぐ」といった作業を通じ、人種がもたらす連帯という可能性を表現しているように思われる。

アメリカの人種主義を多角的に分析・考察し、長いスパンにわたってその歴史をたどった本書は極めて網羅性が高く、ほとんど死角がないようにも見受けられるが、二点ほどさらなる記述が望まれたポイントについてここに述べておく。まず、人種と他属性との交差性の問題である。もちろん著者はこの点を十二分に意識しており、随所において人種とジェンダーや、人種と市民権の交差性が議論の対象とされている。一方で、人種集団内における(あるいは人種横断的な)社会階層の問題についてさらに踏み込んだ分析や事例の考察が含まれば、カテゴリー化によって作られた集団内の重層性や複雑性がより一層浮き彫りになったであろう。労働者階級のアジア系難民と政治的に保守化した郊外に暮らすアジア系の富裕層とでは、アイデンティティの捉え方が異なることは想像に難くない。二点目は、地域性や立場性の問題である。通念的な「人種」理解は白人と黒人との関係、白人とアジア系との関係によって形作られてきたが、一方でたとえば、セトラー・コロニアリズムによって土地を奪われたハワイ先住民の活動家は、リベラルな多文化主義イデオロギーを批判し、アメリカ社会を構成する人種グループの1つとして先住民がカウントされることを拒否している。地域や政治的な立場がどのように「人種」言説の批判的な再考を促すのか、特に市民権の埒外とされてきた先住民や、アメリカ帝国の前哨基地となってきた島嶼地域住民の視点から検証することは重要であると思われる。

アメリカを対象地域とする研究者にとって最新の研究動向を踏まえた独創性の高い研究書である本書は、アメリカを専門としない読者にとってもまた新たな知識や視点を得られる一冊である。人種研究のさらなる発展を促す刺激に満ちた知的貢献であると言える。

…………… 今野裕子(亜細亜大学)